

人間をつくる道 — 剣道—

「いってきまあす。はあ……。」

と言って玄関を出たものの、やる気がわからない。かついでいる防具は本当に重たい。

ぼくが剣道を始めてもう三年になる。もともと、体をきたえるという目的で親にすすめられた剣道だが、友達のさそいで試合の前に見た「日本剣道形」が剣道を始めるきっかけになった。本物の刀を使って行われる形は本当にかっこよかった。その立ち姿、剣の動きなどはとても美しく、自分もやってみたくてあこがれをいただいた。でも、そんな思いも吹き飛ばすほど日々のけいこは大変だった。

最初は竹刀すら持たせてもらえなかった。正座の仕方、立ち方、礼の仕方など、いろいろなきまりをたたきこまれた。

やっと竹刀を持たせてもらえても、防具を着けるまでには一年もかかった。足の使い方、素振りなど、同じ動作のくり返しばかり……。

特に礼の仕方についてはきびしく指導された。

道場に入る前の礼、出て行くときの礼、正面に向かったの礼、相手とけいこを始めるときの礼など。こしを曲げる角度や視線も決まっていて、厳しく教えられた。

「何でこんなに礼にこだわるんだろう。」

こんな疑問をいただきながらけいこにはげんだ。

そんなつらかった剣道だが、いよいよ初めての試合の日が来た。これだけいやなこともがんばってやってきたのだから、勝てるだろう。そう考えていた。

試合が始まり、相手の連続打ちに圧倒され、あっという間に一本取られた。

「まずい。このままでは負けてしまう。」

気ばかりがあせり、相手の迫力に負け、ぼくが後ろに下がった瞬間、ぼくは相手の竹刀を頭で受けていた。

「面あり。勝負あり。」

相手の面が決まり、審判に宣告される。負けてしまった。

ふてくされた態度で引き上げを終えると、すぐに先生がぼくの方に近づいてきた。

(なぐさめなんか、いらない。)

そう思っていたぼくに、先生はまったく予想していない言葉をかけた。

「あのような見苦しい引き上げをする人間に、剣道やる資格はない。ほかの試合をよく見てみなさい。」

意味はよく分からなかったが、しかられたことはたしかだ。先生はいったい何をおこっているのだろう。

しばらくは試合なんて見る気になれなかったが、午後の大人の試合を見ると、動きがぼくたちとまったくちがって、すばやく、見ていてとても美しい。

「大人の試合はすごいな。」

心からそう思ったが、もうひとつすごいと思ったことがあった。それは、試合に負けた方の引き上げだ。礼をする二人は息が合っていて、見ていてとても美しい。

絶対に、負けてくやしいはずなのにどうして立派な態度で引き上げができるんだろう。

数日後、先生がこんな話をしてくれた。

「剣道は、『礼に始まり礼に終わる』と言われるように、礼というものをとても大切にします。自分がどのような状況でも、相手を敬い、尊重するという心の表れです。これは、日本人が昔から大切にしてきた相手を思いやる精神です。このように、一つ一つの動きには意味があり、われわれが受けついでいかなければならないことです。」

「剣道のけいこをする目的は、人間性をみがいていくことです。つまり、剣道は、人間をつくる道なのです。」

「人間をつくる道……か。」

ぼくはこの前の試合のときの引き上げを思い出した。

日本人が大切にしてきたことを受けついでいるとしたら……。

「行ってきます。」

歯切れのよい、元気な声であいさつをして今日はけいこに向かう。いつもとても重かった防具が、心なしか軽く感じられる。